

森本泉『ネパールにおけるツーリズム空間の創出—カトマンドゥから描く地域像』（東京：古今書院、2012年、314頁、6,400円＋税、ISBN978-4-7722-6112-8）

（評）山本 達也*

本書は、カトマンドゥの安宿街タメルを中心にした緻密なフィールドワークの成果であり、観光

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科客員研究員（人間文化研究機構地域研究推進センター研究員、文化人類学）

・ 2008、「ダラムサラで構築される『チベット文化』」、『文化人類学』73(1)、49-66頁。
・ 2013、『舞台の上の難民—チベット難民芸能集団の民族誌』、法蔵館。

を題材に、グローバル資本主義がもたらす地域像の動態的変容と人々の実践や生を複眼的に描きだした力作である。

本書の軸となる議論は「ツーリズム空間の創出」、「地域像」、「人々のアイデンティティの変容」の3つである。まず、世界システム内の不均等な力関係を前提に、差異化された場所を消費する観光客とサービスを提供する地元民との相互作用的实践を通して観光という現象が発現する以上、「第三世界におけるツーリズム空間の創出は、……中核-周辺連関において明らかにしていかなければならない」(20頁)と著者は説く。その際、ローカル／ナショナル／グローバルの3つの尺度から観光を捉えることを筆者は提唱する。次に、観光現象を通して立ちあがるネパールの「地域像」とは、「世界経済の発展過程で構築されると同時に、ローカルな地域の人々の実践の積み重ねによって作り出されるものである」(1頁)り、そうした「地域を差異化しようとするグローバルな経済的文化的力」に対し、ローカルな空間スケールで人々が経済的動機に動かされ、あるいは政治的に反応し、または社会文化的に規制されながら対応してきた実践の積み重ねが、地域を再構築していくことになる」(2頁)。そして、地域の社会文化的変容と連関するのが人々のアイデンティティの変容である。著者はセルトの議論に依拠し、「外部からのまなざしで場所や文化が客体化される過程に、『戦術的な日常的実践』(ド・セルト 1999)を通して適応し、同時に外部からの人や情報、モノの流入によって、政治的には自らもその客体化された場所や文化を部分的に流用しながら、アイデンティティを再構築していく」(vi頁)のが観光空間に生きる人々である、とする。彼らにとって「ツーリズム空間でツーリストが何気なく文化を消費する行為は、……経済機会であるだけでなく、文化的、ひいては政治的に利用する機会にもなり得るのだ」(vii頁)。以上を要約すれば、世界システム内での中核-周辺という不均等な力関係内で発現する観光現象に着目し、観光地としてのネパールの地域像がグローバル／ナショナル／ローカルの3つの要素が相互作用して形成される一方で、地域に住む人々がその力関係を流用し柔軟にアイデンティティを構築していくさまを描きだすのが本書である。

第1章は本書の目的を簡潔に示し、続く第2章では先行研究のレビューを通じ、国際資本と観光の関係性へ着目することの重要性が説かれる。

第3章では、人々の行動を規制するナショナルな空間スケールとしてのネパールの地域像がヒンドゥー的カースト社会との関係性から描かれる。それと同時に、本書の描く地域像とは「ローカルな空間スケールで起きている現象をめぐる人々の語りや実践が前景に現れてくるような、そして閉曲線で囲われることのない、外部世界との関係性の中で動態的に変化し続けるような像であ」(27頁)り、「見る角度によって見え方が異なってくるような、動態的で多様な様相を呈する複眼的な」(28頁)像であることが示される。

第4章では、筆者は西洋がネパールに上書きするヒマラヤ／チベットのシャングリラ像の投影と、ネパール側の対応をめぐる交渉と変遷を描いている。

第5章では、タメルの歴史的変遷が描かれ、続く第6章は「グローバルな資本主義が一方的にローカルな地域を包摂していく過程としてではなく、それに適応しようとする」姿を「企業家」を通して描き、「両者のあいだで生じる相互作用の過程であると同時にその結果であるとして」（112頁）観光空間としてのタメルの創出過程が描かれる。企業家とは特にホテル産業に参入する人々を指し、筆者は彼らへの聞き取りから歴史を再構成し、シャングリラ・イメージとの関係性に起因する彼らの性質や実践の変遷を描きだしている。

タメルという観光地の表層的展開の描写から一転して、第7章以降は、楽師集団ガンダルバがより良き生活環境を求めて観光客との接触の中で自らの位置づけや実践を変容させてきた過程が描かれる。第7章では、「企業家」に含まれない不可触民である彼らが、サーランギーという彼らと不可分の楽器を商品化し、また自らの社会的劣位性を資源として「戦略的」に活用して観光産業に適応してきた過程がアンビヴァレントなかたちで描かれる。

第8章では、さげすまれる楽師カーストから誉れ高き伝統音楽家へ、というガンダルバのアイデンティティの再編過程が、インフォーマントの移住先であるアイルランドでのフィールドワークも含めた丁寧な調査から明らかにされる。カースト社会の底辺に位置し、ネパール文化から排除されてきたガンダルバの実践は、いまや政府が支えるネパール文化の一部をなし、彼らもそれを知ってか知らずか「利用」している（253頁、255頁）。また、彼らは国境を越えて演奏し、著者のインフォーマントであるヒラル氏やラウジ氏のように時に「チベット人音楽家」と誤表象されつつも（270頁）海外で活動するガンダルバも登場する。しかし、彼らの「戦略的」な活動が世界システムに組み込まれていることは看過できないと著者は指摘する（271頁）。世界システム内での「ネパール人」という立ち位置は「忘れないカルマ」であり、彼らのアイデンティティは愛憎入り混じったものになる。彼らが「アイルランドにいる状況が長くなるほど、望郷の対象となった彼らの故郷である村は、彼らの戻るべき場所から一層遠のいていくことになるだろう」（276頁）という指摘は、彼らの行く末を決して称揚できないことを示唆している。

以上の議論をまとめたのが第9章である。場所や文化を消費する観光産業により「立場の如何にかかわらず、人々は国内外との関係性の中でアイデンティティを変容させ」（284頁）るさまを描きだす本書の最後に筆者は「研究対象の人々と時空間を共有し、その場で双方向的な理解と対話が成り立っているかのような思われても、対象の客体化を通して可視化される境界の出現から明らかのように、両者の間にある本質的な関係性は解消されるものではない」（286頁）と語り、まさに自分の調査実践が世界システムの中核-周辺関係の中でおこなわれているという自戒の念を示す。そのうえで、タメルで人々は従来のナショナルかつローカルな価値観に規制されながらも資本主義的価値観を導入し、選択的（『戦略的に』／『戦術的に』）（287頁）に社会文化的な実践を積み重ね生きていることを示し、筆者は筆を置いている。

以上駆け足で本書の内容を概観した。冒頭に挙げた3つの議論軸から見ても各章は有機的に連関

し、地誌として描かれた本書は書評子の目にはきわめて良質な民族誌としても映った。以下ではコメントを簡単に述べたい。

本書はセルトーの実践論に依拠して行為者の「戦術的」対応に注目し、アイデンティティの再編と社会環境の変容を描きだした。一方で、第6章以降「戦略的」という表記が登場し、結論では「選択的に——『戦略的に』／『戦術的に』——」（287頁）と併記されている。しかし、体制を再生産する戦略と体制に変動をもたらす戦術というセルトーの区分は本書では踏襲されておらず、両者は時に併記され、事実、両者の相違に著者は言及していない。

この指摘は一見些末なものである。だが、見方によっては第8章の悲観的な閉幕と戦略／戦術の同居は結びつく。イメージを重ねられた人々の対応とその結果がネパール社会へ反映され再編される過程を描いた（286頁）本書は、「グローバルな空間を編成する権力構造において、世界システムの周辺」が「中核に対抗する術」と「強者を相手に成功をおさめる」（26頁）弱者を描くために戦術に言及した。著者が描く人々の実践は戦術として解釈できる一方で、突如出現する戦略概念は何を意味するのか。うがった見方をすれば、グローバルな力関係内での主体の行為を戦術と解釈するのは捉えきれない残余を戦略は示し、ゆえに第8章は悲観的に閉じられたのではないか。

言うまでもなく特定の実践を戦術的／戦略的と解釈するのは記述者であり、それ自体問題含みの実践である。しかし、実際のところ、人々の実践とは二価性（真島 2006）を帯び、常に中動態（たとえば山本 2013）で描かれるものなのではないか。中核-周辺の力関係を一方的なものとしないうちに戦術概念を導入した著者だが、8章のまとめからは、戦術に収まらない力関係に自覚的であるように見える。この自覚が知らず知らずのうちに著者に戦略への言及を促し、行為者の実践の残余をほめかすに至らしめたのではないか。とすれば、この混乱は肯定的に読むことも可能なのではないか。

これは書評子の偏った解釈かもしれない。「著者は戦略と戦術を同一の意味で使っている」という解釈が正しいのかもしれない。しかしながら、本書を優れた作品と書評子が感じるのは、細部にわたる重厚なデータに基づいた記述と齟齬を起こす理論との間に、上述の行為遂行的な身振りがすまわっているように看取されるからなのである。

参考文献

真島一郎、2006、「中間集団論—社会的なるものの起点から回帰へ」、『文化人類学』、71(1)、24-49頁。

山本達也、2013、『舞台の上の難民—チベット難民芸能集団の民族誌』、法蔵館。